

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：33805

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520552

研究課題名（和文）留学生を対象とした日本語ライティングセンターの設立をめざす基礎研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study to establish Japanese Writing Centers for international students

研究代表者

谷口 正昭（TANIGUCHI MASAOKI）

静岡産業大学・情報学部・准教授

研究者番号：60533213

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、留学生を対象とした日本語ライティングセンターの設立に向け、既存のライティングセンター設立の経緯や、このような学習支援機関の直面する運営上、指導上の問題点を洗い出すことである。国内外のライティングセンターにおいて実地調査（教員・チューターに対する半構造化インタビュー、及びチュートリアルの見学）を行い、ライティング指導、とりわけ留学生を対象とした文章作成指導がどのようになされているのかを、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析した。また留学生に対するアカデミック・ライティングの指導を行う学習支援システムの構築が急務であることを裏づけるアンケート調査を遂行し、ライティングセンターの設立は、今後検討を重ねていくべき重要な課題であることを示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore administrative challenges confronted by existing writing centers and to identify tutorial strategies used by writing centers inside and outside Japan to establish Japanese Writing Centers for university students for whom Japanese is a second language. Semi-structured interviews with the tutors and students, and observation in writing centers sessions were conducted to obtain an idea of what international students face as they create and revise their documents in second language. Implications from this study propose that it is crucial for the Japanese universities to establish writing centers and to develop pedagogy to respond the needs of international students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育、ライティングセンター、アカデミック・ライティング、日本語教授法、留学生

1. 研究開始当初の背景

米国では、1970年代後半から、人種による

教育格差や移民問題に端を発した深刻な学力低下現象が顕在化した。大学をはじめとす

る教育機関は、基礎的なリテラシー能力に欠ける学生の処遇を問題視し、その具体的な対策案として、学術的な文を書く技能の向上を主な目的とする「ライティングセンター」を設立した。現在では米国・カナダにおける千以上の大学に、このような機構が併設され、チュートリアルやネット上の支援などを通して、アカデミック・ライティングに関する諸問題について指導を受けることが可能である。以上、米国において広く普及しているライティングセンターであるが、日本国内では数校がようやく、第二言語としての英語ライティング指導に主眼を置いた支援体制の導入を開始した段階にある。また、当時は国内唯一であった（日本語母語話者を対象とした）日本語ライティングセンターを持つ金沢工業大学では、レポートや課題論文、就職用小論文、履歴書、各種手紙文の文章添削を、支援内容の中心に据えているが、ライティングセンターの基本理念が、「Good Product」の作成でなく「Good Writer」の育成であることを考慮すれば、個別添削指導はライティングセンターの特性とは言えない。加えて、当該ライティングセンターでは、さまざまな文書の添削を行っているということだが、アカデミック・ライティングは、自らの思考を体系的に、かつ論理的、分析的に表現するための技術を要し、手紙文や日記を書く作業とはその性質が大きく異なるため、その指導も通常は特化されている。さらに、米国のライティングセンターにおいては、指導法がある程度確立されており、既成モデルの提示など、ドラフト作成の過程において一時的な支援を行う scaffolding（足場づくり）といった「書く過程に重点を置いたプロセス・アプローチ」が広く用いられているが、指導法に関する研究も国内では遅れていると言わざるを得ない。30年以上の歴史を有する米国においては、ライティングセンターの役割や意義、またアカデミック・ライティングの指導法を論じた先行研究が多数見られるが、わが国では近年、上述の英語ライティングセンターに関する基礎研究がわずかに存在するのみである。

2. 研究の目的

高等教育機関における言語教育の基礎は、「学術的な文を書く技能」の育成であり、これは留学生を対象とした「日本語教育」においても例外ではない。大学や大学院で学ぶ留学生は、日本人学生と同様に、レポート、学位論文、学会誌への投稿論文など、学問研究に携わるあらゆる場面で、「書く」という作業が要求される。米国やカナダでは、このような技能の向上を図るための学習支援組織として「ライティングセンター」が設立され、英語を母語としない留学生にも広く開かれ

た機構となっているが、我が国においては、このような支援体制が皆無に等しく、その必要性に対する認識も希薄である。

本研究の目的は、留学生を対象とした日本語ライティングセンターの設立に向け、既存のライティングセンター設立の経緯や、このような学習支援機関の直面する運営上、指導上の問題点を洗い出すことである。また留学生に対するアカデミック・ライティングの指導を行う学習支援システムの構築が急務であることを調査によって裏づけることである。

3. 研究の方法

- (1) 米国におけるライティングセンター発足に至る歴史を概観し、国内外における既存のライティングセンター設立の経緯をまとめる。
- (2) 国内外のライティングセンターが直面する運営上（スペースの確保など物理的な側面、予算や教員の確保、他学科や学部との連携といった課題）、指導上の問題点（指導法、指導成果、学生の語学力など）を洗い出す。
- (3) 国内の高等教育機関で学ぶ留学生が要求されるアカデミック・ライティングの技能に関し、教員・学生双方に対して調査を行い、どのような指導が望まれるのか、ニーズ分析を行う。
- (4) 国内外のライティングセンターにおいて、どのような指導が行われているのかを明らかにする。
- (5) ライティングセンターの運営上、最も困難とされる人材（教員・チューター）養成について調査し、現状を明らかにした上で、対策案を考える。

4. 研究成果

(1) 【留学生を対象としたアンケート調査】

国内の地方私立大学で学ぶ学部留学生 102名、及び日本人大学生 364名（首都圏国立大学 A 170名、首都圏国立大学 B 90名、地方私立大学 104名、欠損値あり）に対し、大学において要求されるアカデミック・ライティングの技能に関し、①これまで受けたライティング指導経験やその内容、②レポート作成にあたり、どのような点で困難を感じているのか、③どういった要素がレポート作成における「困り度合い」に関わっているのか、などを質問項目の中心とした「質問紙調査」を行った。調査の結果、より少ない労力で体裁の整った最終稿が教員に渡ることを重視する学生が、剽窃等の不正行為を行うという単純な構造が見られた。これは、「書く」過程が軽視され、完成した文章に重点が置かれるという日本国内のライティング教育の現状を反映しており、対話や協同作業によって、作

成途中の文章の質を高めていく「過程」そのものへの評価システムの導入が必要である。一方で、相談相手の有無が、文章作成における困り度に影響しており、これは最終稿が完成するまでの「過程」が重要であることを裏づける結果である。

(2) 【国内外のライティングセンターにおける実地調査】

ライティングセンターにおいて実地調査(教員・チューターに対する半構造化インタビュー、及びチュートリアルの見学)を行い、ライティング指導、とりわけ留学生を対象とした文章作成指導がどのようになされているのかを、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(以下 M-GTA)を用いて分析した。その結果、ライティングセンターを利用する留学生の多くが、形式面で正確である完成原稿に価値をおいていた。そして、ライティングセンターに対する誤った認識のもと、チューターに教師としての役割を期待し、文法や語彙等の形式的な誤りの訂正を要求していた。これは、留学生が母国で受けてきたライティング指導や、教師は目上の立場にあり、生徒に知識を与えるものである、といった既成概念が影響している。

調査を行ったライティングセンターにおいては、母語話者同様、第二言語学習者に対しても、対話・共同作業といった「プロセス」を通して、「自立した書き手」の育成をめざすことに重点が置かれ、内容や構成といったマクロ的な視点からチュートリアルが行われていることが明らかとなった。また、対話を通して誤用訂正(書き手、またはチューターによる)も時になされていた。一方、同じような文法的語彙的な誤りを繰り返す学習者にはワークショップへの参加を勧めたり、添削を必要とする学習者に対しては、有料の校正サービスの紹介を行ったりする、といった対応がなされていた。ライティングセンターの理念を利用者に説明する必要性についても多くの機関において指摘がなされていた。

【視察訪問大学】

大阪女学院大学

金沢工業大学

京都精華大学

東京外国語大学

東京大学

北星学園短期大学

早稲田大学

Auckland University of Technology

Hawaii Pacific University, Honolulu

Loyola University, New Orleans

National University of Singapore

San Diego City College

San Diego Mesa College

San Diego State University

Stanford University

The University of Auckland

The University of Chicago

Tulane University, New Orleans

University of Hawaii at Manoa

University of Malaya, Malaysia

University of New Orleans

University of San Diego

(3) 今後の展望

(1)の研究結果は既にまとめ、現在論文を投稿中である。(2)に関しては、今後も継続して分析を行い、論文としてまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

①谷口正昭、谷口ジョイ「『添削』を行わないライティング指導は可能か：米国ライティングセンターにおけるプロセス重視の指導」、日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウム、2010年8月、ポートランド州立大学

②谷口正昭、谷口ジョイ「日本語ライティングセンターの設立に向けたニーズ調査」(ポスター発表)、言語教育評価共同研究所第2回言語教育評価フォーラム、2010年9月、桜美林大学

③谷口正昭、谷口ジョイ「留学生を対象とした日本語ライティングセンターの設立に向けたニーズ調査」、日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウム、2010年7月、函館国際ホテル

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

谷口正昭 (TANIGUCHI MASA AKI)

静岡産業大学 情報学部 准教授

研究者番号：60533213

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：